

Norin Ten とサステイナビリティー

前回に続いて映画の話から始めたいと思います。「Norin Ten 「農の神」と呼ばれた男 稲塚権次郎物語」(主演 仲代達矢、監督: 稲塚秀孝)が今年の五月に富山県で先行公開され、一〇月からは全国で公開されることになっています。

稲塚権次郎はご存知でしょうか。私の故郷のごく近く、富山県城端町に稲塚の生家があり、その隣の神社に銅像が建っています。郷里では非常に有名な人ですが、映画のタイトルとなった「Norin Ten」はその名が世界中に知られています。

稲塚は一八九七年に生まれ、帝国大学農科大学を卒業して農商務省に就職し、一九二六年から岩手県農事試験場で小麦の品種改良に取り組み、一九三五年に「小麦農林十号」を作りました。これが「Norin Ten」で、後に「緑の革命」の原動力となりました。

た。

「緑の革命」は高収量の品種を導入したり化学肥料を投入するなどして穀物の生産性を向上させて、食料危機から人々を救った農業革命です。一九六〇年代にインドやパキスタンで大成功をおさめ、そのときに導入されたのが「農林十号」に改良を加えた短稈多収の品種でした。稲塚は、東北の寒冷な気候でも収量を増やせないかと、背丈を低くすることで栄養分を実に集めることを考えて「農林十号」を作りました。戦後、進駐軍がその優秀性に着目し、ワシントン州立大学で改良が加えられ、さらにメキシコにある国際トウモロコシ・コムギ改良センターでノーマン・ボーローグらによって改良が重ねられて「緑の革命」で使われたのです。ボーローグは誰よりも多くの人を救ったとして一九七〇年にノーベル

林 良博

はやし よしひろ

独立行政法人 国立科学博物館長

(専門はバイオセラピー)

平和賞を受賞しました。ボーローグは一九九〇年に稲塚の生家を訪れて記念講演を行い、「ノーベル平和賞は彼に与えるべきだった」ということを述べています。稲塚は一九八八年に九一歳で亡くなっています。

ボーローグがノーベル平和賞を受賞したころは、急増する世界の人口にいかに対応するかということが大きな課題となっていました。しばらく前のテレビ番組で、一九七四年の新聞を映し出して、そこには大きな見出しで「子どもは二人に」と書いてありました。当時の日本は人口が増え続けていきましたので、これからは出生率を減らして人口を安定化させる必要があるということであったのです。「子どもは一人に」ということには七割の人が賛成と答えたそうです。その新聞には、子どもの数は国が決めるものでなくて個人が決めるものだとということがコメントとして書いてありました。

その後は、「子どもは一人に」といわれて

真面目に取り組んだからというわけではないにしても、結果として出生率は低下し続け、二〇一四年の合計特殊出生率は一・四二でした。総人口は二〇一〇年から減少に転じ、四〇年前とはまるで違って、いまでは人口減少と少子高齢化が大問題となっています。

驚くことに、一九七四年の時点で、これから出生率を減らしていくと日本の人口は二〇〇八年で減少に転じるという予測がなされていきました。非常に正確な予測だったといえます。ただ数字上の予測は正確であっても、人口減少がどれほど深刻な問題をもたらすのかということについては、もしかしたら危惧していた人もいたのかもしれませんが、大多数の人は気が付いていませんでした。認識が甘かったといわざるをえません。

限界集落、消滅可能性都市といった言葉に象徴されるように人口減少と少子高齢化はきわめて厳しい問題です。地域から子ども

もたちの姿が消えていくということは、高齢者を支える人がいなくなつて実際に大変だということに加えて、精神的なマイナス面も大きいのではないかと思います。子どもたちが少なくなつた地域に、子どもづれで移住してくる家族を優遇するといったことがいろいろな自治体で行われています。子どもが一人、二人増えたからといってすぐに地域社会が変わるわけではないのですが、地域の人々は子どもたちを本当に喜んで迎えています。子どもがいるだけで精神的に豊かになるような大きな効果があるからなのでしょう。

一九七〇年代には人口増加を防ごうとして、インドでは断種をしたり、精子発生を止める危険な薬を一〇万人規模で配つたりといったかなり極端なことも行われました。中国で「一人っ子政策」が始まったのは一九七九年でした。日本の人口が減少に転じたのは国の政策に導かれてこの頃ではなくて一人一人の選択の結果です。とくに女

性が子ども出産し育児をしながら社会的な活動を続けていくための社会的なサポートが十分でなかったために、結婚をしないとか、子どもは生まないとかいった選択がなされてきたのが大きかったのだと思います。

持続可能な社会を築くために、例えば五〇年先の社会を予測して、そこに至るためにいまから何をしていたらいいのかを考えるようなことがよく行われています。四〇年前に、人口問題について数値としては正確な予想ができていたにもかかわらず、社会にどのような問題をもたらすのかといったことは予想できていませんでした。わたしたちはその反省に立つて、未来に向けて思索していく必要があります。まずは映画『Narin Ten』を見て、明治、大正、昭和の時代を生きて農にすべてを捧げた稲塚権次郎に思いを馳せて、サステイナビリティについて改めて考えてみたいと思います。

足の裏の哲学

下駄は履物というよりも、携帯用の廊下である。鼻緒の一点で、廊下を足にぶら下げて歩く

この一文は、赤瀬川原平による「下駄」の定義です（雑誌 芸術新潮2、二〇一五（追悼大特集 超芸術家赤瀬川原平の全宇宙）、松田哲夫「下駄とウインドロ 赤瀬川文体における身体性と比喩」）。

松田哲夫は「鶴見俊輔さんの提案で『定義集』という本を作ったことがある。（中略）鶴見さんが「これはいい！」と絶賛したのが赤瀬川さんの「下駄」の定義だった」と述べています。この一文は、ひよつとすると日本の身体論、身体芸術の核心を突いているようにすら思えてきます。

江戸時代まで日本人は、草履（ぞうり）や草鞋（わらじ）を履いていました。つまり、素足にちかいかい歩き方で地面をなげるように歩いていた。剣道をはじめ多くの武道は素足の運動で、じつに大地といかに安定して接するかが基本となり、その動作は、日常の

ありとあらゆるしぐさの基本となっていたはずですが、その一つの象徴として「下駄」があります。ヨーロッパでは紀元前から靴を履きはじめていたようで、大地に対してむしろ反発する歩き方が基本となります。この歩き方の差が、意外と文化的に大きな差を生み出してきたのではないのでしょうか。

歌舞伎や舞踏の演技で右足が出るときに右手を出すような動作を「なんば」といいます。木寺英史によると、この「なんば歩き」は、舞踏の世界でよく語られているようですが、その語源については諸説があり定まっています（『本場のナンバ 常足（なみなし）スキージャーナル株式会社 剣道日本』）。興味ぶかい説として、「なんば」は田下駄の一種で深い田の農作業で使う履き物で、踏み出した足が深く沈まないように工夫されたものという説があります。例えば、右足の田下駄を前に出すとき、右側の手で引くので、これが右足が出るときに右手を出すよう

大崎 満

おおさき みつる

北海道大学大学院教授

（専門は根圏環境制御学・植物栄養学）

な基本動作の「なんば」になるといふ説です。この田下駄は登呂遺跡からも出土しているようです。

木寺英史は「なんば歩き」は、右足が出るとき右手も前に出す、というように説明されるが、それは正確でなく、農耕民族の労働の基本姿勢は、右足が前に出るときには、右肩が前へ出、極端に言えば、右半身全部が前へ出るといふ動作であると指摘します。しかし、このような歩行は、全身が左右交互にむだに揺れて安定的でないので、じつさいの労働の際には、腰を入れて、腰から下だけが前進するようにし、上体はただ腰の上に乗っかって、いわば運搬されるような形になるといいます。能の基本になる「運歩」もこのような動作で、上体は絶対に揺れない。このように「なんば歩き」は手を振るのではなく、左右の半身を繰り返す動作で、いわば半身の構えのことです。盆踊り、歌舞伎の六方（ろっぽう）、和服を着たときの身体操作（外人の和服姿に違和感を感じるの、この身体操作の違いによるのでは？）、剣道や武道の動作など、じつは「なんば歩き」こそが日本文化の基礎動作であったといってもよいかもしれません。

さらに木寺は、上肢（腕）をだらりと下げて肩の

力を抜き走っていると、同側の足と手がほぼ同時に同方向に振られていることに気づきます。つまり、着地している足と同側の肩が前方へ動く動作になり、この走り方を「なんばジョギング」と名づけます。

「なんばジョギング」を繰り返していると、さらに肩の動きが重要なことに気づき、「着地足側の肩が前方へ動くだけではなく、下方に引き込まれ、身体の左右に軸感覚が生まれてきた」といいます。これは、体の中心を通る一本の軸ではなく、左右二本の軸を交互に使って走る感覚で、「二軸動作」の常足（なみあし）に至ります。この常足は、馬が普通速度で歩くときの歩き方で、左右に軸をつくり、体を左右に揺らしながら前に歩く歩様です。そこで、木寺はこの二軸を操作した走歩行（運動）を「常足」と名づけます。

木寺は、二軸感覚の動作は体幹を面として使う特徴が有り、このためには股関節の柔軟性が必要で、そのためには股関節が多少外旋（外側を向いている）していること（股関節外旋位）が大切といえます。柔道、合気道では股関節外旋位の構えが基本です。最も顕著なのが相撲で、「股割り」「四股」「すり足」

は股関節の外旋に必要な柔軟性を高めることを目的としているといいます。また、股関節を外旋位にするためには足運びが重要になって来ます。

相撲の動きは典型的な二軸感覚によるものです。突き・押しの動作も左右軸を基準に行われます。そして、拇指球に体重を乗せるのではなく、踵をしつかり地面につけて、左右の股関節を支点とした身体操作になっています。

つまり、左右軸の感覚を身に付けるためには、踵から小指側のアウトエッジに足圧を感じ、親指の付け根の拇指球はほとんど接地しないで浮かせたままにしておくような感じ です。宮本武蔵も『五輪の書』で足運びとして「つま先を少しうけて、きびすを強く踏むべし」と述べていて、きびすは踵です。二軸感覚の動作の基本を説いていたことになりました。「二軸動作」の常足を習得すると、「丹田感覚」も身についてくるといいます。

丹田というののも体の中にその構造物はありませんから、身体感覚の一つととらえていいでしょう。

／剣道では、「丹田に力をいれよ」という教えがあります。多くの剣道愛好者が下腹の力が抜けないようにと努力しています。しかし、下腹付近の理想的な感覚（丹田感覚）とは、力が入ることではありません。これも常足歩行を日課にしてから明確になってきたのですが、丹田感覚は二軸感覚と同じように充分に下腹付近がゆるむことよって出現します。（中略）中心軸感覚の歩行では体幹をねじって歩きますから、左右の動きの交差する点が膺の位置よりかなり上方に感じられます。どうしても、丹田感覚が生まれてきません。ところが、常足歩行では左右の股関節を動きの支点とします。丹田感覚が顕著になるようです。

「常足動作」は、日本の演芸、武芸の基本動作として文化に内在化している様式と纏めることが出来るかも知れません。具体的動作としては、「二軸動作」「股関節外旋位」「つま先を少しあげて、踵を強く踏む足運び（武蔵に習って「きびす足運び」と呼んでおきます）」で、体感として「丹田感覚」をとまいません。安田登は動作に関わる筋肉として、表層筋と深層筋があり、能では深層筋（大腰筋）が極めて重

要であるといえます(安田登『疲れない体をつくる「和」の身体作法 能に学ぶ深層筋エクササイズ』祥伝社黄金文庫)。「常足動作」に深層筋の概念をいれると、身体の動作と機能を基盤とした日本の文化が一層明確になってくるはずです。

幼児の歩き方は、五歳くらいまでは、体幹をねじっている子供はおらず、皆「二軸歩行」をしています。それが、大人になると、中心軸感覚の「一軸歩行」になると木寺英史は指摘します。世阿弥は、理想の能、理想の演技は「幽玄無上の風體」といい、「童形(どうぎよう)なれば、何としたるも幽玄(いうげん)なり」と断言しています(世阿弥『風姿花伝』岩波文庫)。子供は深層筋が主体で、「二軸動作」が基本です。あらためて、世阿弥の「幽玄」の姿(風姿)とは、深層筋を基礎とする「二軸歩行」で、「きびす足運び」と整理できます。

赤瀬川原平のいう意味での「下駄」を履いた競技として、まずスキーがあります。スキーは二枚の板に乗りますので、基本動作は「二軸歩行」のように思えます。しかし、ターンをしますので、このときは完全に「一軸歩行」になります。右に回転すると

き、左足(山足)に体重を乗せ、内側のエッジを立てますので、足の裏の内側に力がかかり、親指の付け根の拇指球で制御する感じになります。このとき右足(谷足)に体重は載せません(理想的には浮いている感じです)。スキーは一枚の板がありませんが、実際は直下滑降以外は一枚の板に乗っている、典型的な「一軸歩行」動作になります。では、スキーのジャンプはどうでしょう。直下滑降で滑って、空中では逆ハの字で滑空します。そのとき、スキーの板の微妙な角度の調整をしているはず。それを親指でする(一軸歩行様式)のか、小指でする(二軸歩行様式)のかで、大きな違いが出て来ると思えます。バランスを取るのに二軸歩行様式の方が有利な感じがしますので、小指制御が有利ではないかと思えます。ジャンパーの高梨沙羅は成長とともに重心が上がってきているのではと指摘されていますが、二軸歩行で丹田感覚を身につけると、重心が下がってくるはず。レジェンド葛西が四〇歳を超えてなお一線級の成績をマークしているのも、老化の早い表層筋よりも深層筋を使った「二軸歩行」様式で飛んで、足の小指で板を制御しているはず。機会があったら聴いてみたいところです。

また、赤瀬川原平のいう意味での「下駄」に近いのに登山靴があります。これは、足を皮で包んで、歯を取った下駄を貼り付けたと考えてみてください。登山靴の命は、底が固く曲がらないことです。つまり下駄機能です。曲がると、つま先に力が入ったりで、長期登山では足を痛めます。力は足裏全体で受け止めます。登りは、靴先が地面に食い込めば足の裏全体で体を持ち上げられます（靴底が柔らかいとつま先だけで体の重さを支えることになりません）。下りは、踵からおり、やはり足の裏全体で体重を支えます。つま先から下りると、登山靴を履いていてもつま先に体重がかかり、つま先が著しく疲労します。登山靴は底が下駄のように固く、つま先と特に踵が重要になります。登山とは、二軸歩行様式の典型でもあり、深層筋を強化する運動でもあります。つまり、日本に西欧式の登山・登山靴が普及したのは、意外と登山靴が下駄構造をもっていたせいかもしれません。

雲南の元阻県の一八〇〇メートルの高地地帯にあるハニ族集落で、棚田（こちらでは梯田）を調査したことがあります。ここは、照葉樹林文化地帯で日

本文化の一つのルーツであると考えられています。

ホテル（人民政府招待所）は山の稜線にあり、夜、まるですり鉢の底から、月が浮いてくる闇の不気味さ。月が去ると、すり鉢の棚田は漆黒の闇に吸い込まれていきます。朝霧に煙る、すり鉢状棚田の尾根から二時間ほど下って、すり鉢の中腹で一息ついてみると、薪を背負った少女が急斜面を下りてきて、薪の背負子を石組みの棚において休みました。薪の量に驚き、ちよつと背負ってみようと思いました。びくとも動きません。同行した中国のたくましい学生が何とか背負うことが出来ましたが、一歩も踏み出せません。華奢な女の子が、笑みを浮かべてまたひよいひよいと下って行きました。これは衝撃です。この身体能力は一体何でしょうか。今は、やっつ、これは深層筋を強化した二軸歩行様式の典型でないかと理解しています。比叡山延暦寺には千日回峰行の荒行がありますが、歩行禪といわれるように、歩行の基本姿勢は座禅している状態と同じで、背筋はぴんと伸ばして、上体をピシツとして、腰から下が動いている感じだそうです（光永圓道『千日回峰を生きたる』春秋社）。さらに、人によるようですが、内股だと足首を捻挫しやすく、がに股気味で歩くそう

です。マタギや山伏の身体能力も含めて、山での歩行様式を説明すると、身体能力を中心とした縄文文化が日本の基層文化にあることを明らかにしてくれるかも知れません。

木寺は、「二軸感覚の動作」が最も顕著なのが相撲で、「股割り」「四股」「すり足」は股関節の外旋に必要な柔軟性を高めることを目的としていると指摘しました。したがって、日本人力士が弱くなったのは、社会全体から「二軸感覚の動作」の文化（深層筋文化）が失われつつあることを示している可能性があります。一方で、モンゴルの力士が強いのは、モンゴルに文化として「二軸感覚動作」（深層筋文化）が健在であることを示していると思います。表層筋を発達させるだけだと、重心が上上がり、腰砕けになる。モンゴルにある「二軸感覚動作」の深層筋文化とはなんでしょうか。

モンゴルの旧正月にバヤンデルグ群草原（首都より二五〇キロ）で、郡長さんの草原のゲルを拠点に調査をしたことがあります。旧正月開けにゲルからゲルへと正月の挨拶回りに同行します。馬などほとんど乗ったことがないのですが、進めはチョウと言

い、曲げるのはその方向に手綱を引き、止めるのは手前に手綱引けばよいとだけ教えられて、いざ出陣。もう一つ、日本の馬の専門家から、乗馬のこつは、頭の頂上に糸がついていて、その糸にぶら下がっているイメージで乗ることであるとアドバイスを受けます。

これは、歩き方の理想でもあり、結局乗馬とは、馬の上で理想的な歩行を実際に行っているのと同じ事であるといった、哲学的な話も聞きます。初心でしたが、あつという間に、ギャロップが出来るようになりました。でも使う筋肉がまるで違うので、氷点下三〇度と寒いのですが汗が吹き出し、心地よい疲労感があります。乗馬というのはどうやら深層筋を使った「二軸感覚動作」であると、今は理解しています。馬上では馬が重力を受けてくれるわけですから、表層筋を使うことはほとんどないので、馬の歩調にあわせて、深層筋が働くことになるようです。つまり、馬の歩行自体が「二軸歩行」で、馬上でそれに同調しているのですから、結局「二軸歩行」を受動的に行っていることになりました。

次の日は、大きくて乗りやすいのではないかと駱駝に乗ります。しかし駱駝は人のいうことを聞かず、座れとモンゴル人が手綱を強引に引いても、口から

泡（反芻した植物の分解液で猛烈に臭い）を吹きかけて挑発的です。駱駝に乗るときはモンゴル人も棍棒を持っていて、ひっぱたいて制御しています。馬に比べて、走ると速いし、上下運動は大きいし、言うことは聞かないし、波長が全くあわず、ぐったりします。腰がガタガタになり、ギブアップ、伴走車に乗せてもらい、ゲルに帰り独り寝。

野生では、馬は外敵から身を守るために集団でいますし、駱駝は砂漠の劣悪な環境下でも草も少なく分散して生活しています。馬と駱駝に乗るだけで、調和は深層筋で、格闘は表層筋であることを今は理解しています。さらに踏み込むと文明や文化もその性格によって、調和・共生的な深層筋文化と闘争・戦闘・略奪的な表層筋文化に分けられるかもしれません。

馬を使ったホース・（アシステッド）セラピーは、欧米では乗馬療法として古代ギリシャの時代から長い歴史を持っており、心身両面へのセラピー効果が認められています。私の研究室を修了してアメリカでホース・セラピーの学位を取った Sarah によると、馬は本来群れで行動する社会性を持ち、人よりも大きな体を持ちながら従順で、心優しい動物で、馬と

気持ちに通い合う「心理的效果」が期待されるといいます。また、馬に乗り、ただ歩くだけで日常使わない筋肉や神経を使うマッサージ効果といった「身体的効果」も期待できるといいます。特に、常歩（なみあし）騎乗では、足やひざに負担をかけずに有酸素運動（おそらく深層筋活動）効果が得られることから、病氣療養のリハビリ用の運動療法にも用いられています。

モンゴルの乗馬では、木製のモンゴル鞍を使い、馬と人のジョイント装置のようで、特に立ち乗りをするときとても楽だそうです。しかし、私が乗ると連続タタキ機に乗ったようなもので、素人は厚めの布を鞍代わりにして腹帯で締めて乗馬します。モンゴル鞍による乗馬では、馬と人が完全に一体となりますので、表層筋は使わず、深層筋により調整しているはずで、モンゴル乗馬とは、実は相撲の基礎を騎乗で鍛えていることにならないでしょうか。モンゴルの有力力士で、馬に乗れないのがいるかどうか、興味深いところです。

旧正月には六歳から一二歳までの子供による一五キロ走の子供草競馬があります。優勝した一〇歳ぐらいの子供が馬上で勝利の詩を詠って、鷹の舞を舞

います。馬は汗と湯気でモウモウとしています。力士の白鵬が、制限時間前の最後に塩をまく姿が一瞬、鷹の舞に似たような仕草をしている感じがします。今は、この鷹の舞は、「草原の能」ではなかるうかという気がしています。身体動作の基本は全く同じはずですので。

名古屋春風館道場には、柳生新影流と円明流（宮本武蔵の流儀）が伝わっており、技法の比較と春風館に伝わる『刀法録』の解説により、新影流と円明流の密接な関係が分かっています（赤羽根龍夫・赤羽根大介『武蔵と柳生新影流』集英社新書）。柳生新影流は、相手を動かして勝つ「勝人剣（かつにんけん）」で、武蔵の円明流は、相手を追い詰めて勝つ「殺人剣」といわれます。新影流の「転（まろぼし）」、円明流の「円」だけでなく多くの日本の武道は、「円」を極意とします。では、なぜその様な武術が日本で生まれたかです。

日本の農業は田植えや草取り稲刈りなど長時間の農作業が必要とされます。そこで、疲れない腰を痛めない身体操作——膝を緩めて腰を垂直に落とす——が自然と生まれました。鋤や鍬などの農具は、農具の重心を自分の重心に近づけるように手元に引く遣い方が疲れにくいということを自然と覚えました。このことは現代でも日本のノコギリが西洋の様に前に押し出さずに、引いて遣うことでも分かると思います。刀も突くのではなく、円く引き斬る構造になったのです。／一方、西欧文明での戦闘方法を作りあげた民族は、狩猟民族であるゲルマン人といわれています。（中略）ゲルマン人の身体操作がヨーロッパ人の武術の動きのものになつていると考えられます。／狩猟では、より速く走りより高く跳ぶことが絶対的条件ですから、農耕とは違って直線的に走って獲物を追いかける、つま先立って跳び込みます。それには瞬発力を必要とした重力に逆らった筋力を鍛えることが大切になります。ここからヨーロッパ式体育の「より速く、より高く」といった考え方が生まれていきます。

円明流や柳生新影流は、農耕民族である伝統的日本人の身体操作を結晶化し、今日に至るまで護り続けています。清水博は、生命が、刻々変化する「場」

(生命に影響をおよぼす作用空間の意味に理解される) や未知の「場」に遭遇したときの情報処理システムの解明にチャレンジし、具体的な型にとらわれない柳生新影流にそのヒントを見いだし、新影流の「転(まろはし)」という原理(概念)に注目します(清水博『生命知としての場の論理 柳生新影流に見る共創の理』中公新書。少しむずかしい論理展開ですが、これまでほとんど欠落していた極めて短時間の情報処理システム(思考・論理・哲学・文化全般に係わる判断基準)について、武術とその論理化によって、新たな哲学・思想を生み出そうとした重要な論考ですので、以下に長くなりますが引用します。

「自分たち自身でコヒーレントな関係をつくり(自己組織)ながら、その関係にしたがって自律的に自己を決める」ということから、私は生命的要素のことを「関係子」と名づけました。そして関係にしたがって自己を自律的に決めることを、「自己を表現する」と呼んでいます。この自己表現性をもつためには、関係子に「超越的な立場から各自の拘束条件を決定していく働き」がなければなりま

せん。／このように、関係と表現から生命を探索していく学問のことを、私は生命関係字と名づけています。生命関係字の大きな目標は、「生命的要素(関係子)の間のコヒーレントな関係の自律的な生成」を出発点にして「リアルタイムの創出知」の原理を明らかにすることです。

関係子が自己を表現するということは、正確に言えば関係子が自己を自己言及的に表現するということなのです。それは何か外から与えられたルールを使って自己を表現するのではなく、自己の内部でつくったルールにしたがって自己を表現していくということなのです。つまり、新しいルールをつくるときの基準(評価法)が関係子自身の内部に存在しているのです。／人間にも、ご機嫌の顔をしているときと、仏頂面をしているときがあるように、関係子の基準も一定ではなく、「虫の居所(内部の状態)によって変化をします。(中略)一般に関係子が自己を表現すれば、その表現をしている身体が関係子に含まれることになるので、その前後で状態が変わります。すなわち、表現したものの影響を受けてルールが変わってしまうの

です。

結論として、日本の伝統文化の大きな特徴は、「リアルタイムの創造の原理の上に立って、独自の理と術を創ってきた」ということです。このリアルタイムの創出は「自他非分離的な創造の原理」で、近代科学の方法と論理である「自他分離的認識の原理」で解明することは困難と指摘します。そして、「リアルタイムの創造の原理」には脱学習が重要だと次のように指摘します。

リアルタイムの創造を原理とする日本の伝統文化の習得では、意外にも、まず一生懸命に型を学習しろと言われます。(中略)では次ぎにどういうことが必要かという点、今度は過去に学んだ型にとらわれないということなのです。これが学習 Learning とびんがんです。これは型にとらわれないということであって、学習したことを単純に忘れるということではありません。／これまでの脳のネットワーク理論や人工知能の理論には、この脱学習がありません。無数の特殊を集めれば普

遍が生まれてくると考えているからです。したがって、そこにあるのは学習の理論ばかりです。これは完璧なマニュアルをつくれれば、どのような状態にも対応できるという「知識的な知」の考えにつながります。知識の学習ばかりでは、学べば学ぶほどシステムが硬直化し、自由度を失っていきます。そのために脱学習ということが必要になってくるのです。

「リアルタイムの創造知」は「身体的な知」です。その場で身体を使って、ある行為をはじめておくことなうためのものであり、知識からではなく、こうしたいという身体的要求から出発していくことです。この「身体的知」をひらたくいうと、「感性」に他なりません。リアルタイム創造とは、感性の発動に他なりません。一方、「身体的な知」と対比すると、西欧の文化は、「機械的な知」(外的な基準に照らさなければ行動することができない)、言い換えると「知識的な知」で構成されていることが明確になります。さらに、「身体的な知」を習得すると、能でも馴染みの「見の目」「観の目」を開くことが出来ます。清水博は、宮本武蔵の『兵法三十五箇条』にふれ、「真剣勝負に

臨むときの心構えが書かれています。対象化して正確に捉える「見の目」と、場所の中に置いて捉える「観の目」の二種類の目をもって敵を見ることの必要性を説いています。場所的關係の中に己と敵を置いて、主客を超越した関係という観点から場所全体の状況を捉えようとする、敵の意図はおのずと明らかになるものです」と述べ、宮本武蔵の身体操作は禅や能にもつうじているといっています。

道元に「創造不断」という有名な言葉があります。

これは、絶えず創造しては壊すことの不断な連続であると思っておりますが、これが、「リアルタイムの創出性」であります。それは、試行錯誤を繰り返した後で良いものを発見するというのではなく、その場その場で適切なものを刻々とつくり出していくという考えです。しかし、どうすればこの「リアルタイムの創出性」が実現できるかという原理はまだ科学的には発見されていません。／したがって、その原理を発見し、その応用を考えることが、私が目指してきたことでありますが、一口に言えば、それは無（無限定な状態）からいくつかの適切な働きが同時に創出されるとい

形をとります。無の状態とは円錐形の形をした山の頂に大きな丸い岩が置かれている不安定な状態に相当します。特定の方向に転がすということは、その特定の方向以外には岩が動いていかないようにすることです。ですから、私はこれを岩の運動に拘束条件を与える、という言い方をします。もしも、その岩の運動がまったく新しいものであれば、その運動を生成するために新しい拘束条件が必要になるわけです。このように無からの刻々の創出（リアルタイムの創出）では適切な拘束条件をどのように創るか、つまり拘束条件の創出ということが最も重要な問題になってくるわけです。これらに関連して、私は柳生新陰流の「無形の位」と「転（まろばし）」という考え方に共通性を感じ、大変興味をもっております。

ここで、「無形の位」（＝自己無限定性）とは、一定のルール生成ルールをもち、その意味で自己同一性をもっているが、個別的なルールにはとらわれない無限定な状態をいいます。上泉伊勢守（新陰流の創始者）は、「無形の位」からの自由自在なルール創出に普遍の剣を見いだして、自由自在に技が創出さ

れることを「転(まろぼし)」とよんだということです。これは、本当のところは、新陰流に入門をしないと理解できないことですが、おそらく似たようなメカニズム(「無形の位」と「転(まろぼし)」)が、より複雑ですがサッカーにも現れるようです。

NHKシリーズ「ミラクルボディー」の第二回(<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2014/06/08/>)では、前々回ワールドカップ優勝、近年のビッグタイトルを総なめにしてきたスペイン代表の「司令塔」シャビ、そして攻撃の起点を作る「魔術師」イニエスタを取り上げ、空間統計学の専門家の分析(全選手の位置情報を完全記録する4K高精細俯瞰カメラ映像解析)と最新の脳科学での二人の脳解析から、サッカーの組織プレーに秘められた、心と肉体の驚異な世界を紐解いてくれました。これは、新陰流における「無形の位」と「転(まろぼし)」であると思われました。

シャビはパスをするときの全体認識が極めて優れているのですが、シャビに映像を見せながらMRIで脳の活性部位を調べると、大脳基底核が活性化されていて、ここは直感や空間認識の場で、経験や知識が長期的に蓄積される場所です。無意識と直感で

パターンを選ぶ、将棋の棋士の活性部位と同じようです。日本選手や並の選手は、思考・意志決定をする前頭前野で考えながらプレーしていることも分かりました。つまり、並の選手は、頭で考える頭脳的プレーをしているわけです。シャビは無意識の直感のルール生成ルール(蓄積されたパターン選び取っていく)を持っていることを示しています。一方、アンドレ・イニエスは瞬間的想像力にすぐれる芸術家タイプと判定されています。例えば、一分間で五点を結ぶパターンで四九個の違うパターンを描けますが、スウェーデンのプロサッカー選手では三九個パターンが精一杯です。つまり、全体の位置を把握して、パスを送る最善のパターンを一瞬で把握する能力が高いことを示しています。

想像するに、上泉伊勢守(新陰流の創始者)や宮本武蔵は大脳基底核を活性化し、佐々木次郎は前頭前野を活性化させていたのではないのでしょうか。新陰流の武道家に切りつけてくる映像を見せながら、脳のMRIを取ってみると、日本の伝統芸能における「身体的な知」を脳科学レベルで解明できるかも知れません。

内田樹は「身体的な知」の考察を進め、デカルトの「我思」ゆえに『我』在りではなく、「我思」ゆえに『思』あり」と転倒してしまいましたが、『武道的思考』筑摩選書。

とりあえず学生たちには形を遣い、剣の抜き方納め方を稽古してもらおう。／当面の課題は「刃筋が通る」というのはどういうことかを実感することである。／それは要するに「剣には剣固有の動線があり、人間は賢（まか）しらをもつてそれを妨げてはならない」ということに気づくということである。自分を主体として立てて、剣や杖を対象的に操作しようとしてはならないということに気づくということである。／剣や杖には、それぞれ「お立場」というものがある。だから、それを尊重する。／私自身の筋肉や関節や腱や靱帯にだって、やはり「お立場」というものがある。だから、それを尊重する（しない）とあとで痛い思いをする。／そんなふうだから、武道の稽古をしていると、あちこち気を遣う相手ばかりで気疲れてしょうがない。／だが、そうやって剣やら杖やら体術の相手やら自分の身体各部やら、すべてのものは

たらきを妨げないように気を遣っていると、「そもそも、この『気を遣っている』主体というものはどこにいるのか？」という深甚な疑問に逢着することになる。／主体って何？／武道はこのデカルト的省察をデカルトとは逆方向に進む。／「我思」ゆえに『我』在りではなく、「我思」ゆえに『思』あり」の方に分岐するのである。／技術的には、主体なんてなくてもぜんぜん困らないし、むしろそのようなものはない方がまだからである。／この逆説的状况に学生諸君を投じるために、お稽古をしているのである。

前田英樹は『宮本武蔵』五輪の書』の哲豆（岩波書店）で、武蔵とデカルトを比較しながら、武蔵は実に思想家として評価できるといいます。武蔵は「実の道」を行なう「法」として次の九箇条を挙げています。「実の道」の対語として、武蔵は「外道（げど）」といいますが、前田英樹は「外道」の特徴とは、（実在の運動）を離れて、おのれのほしいままの空想から事物を裁断することにある。（中略）ああだ、こうだと奇妙な技や策略を捻り出す。こういう者が、「外道」にはまった兵法者の典型です」という。以

下が「実の道」を行なう「法」（行動上の規則）です。

第一に、よこしまになき事をおもふ所

第二に、道の鍛錬（たんれん）する所

第三に、諸芸にさわる所

第四に、諸職の道を知る事

第五に、物毎（ものごと）の損徳をわきまゆる事

第六に、諸事目利（めきき）を仕（し）覚（おぼ）ゆる

事

第七に、目に見えぬ所をさとつてしる事

第八に、わづかなる事にも気を付くる事

第九に、役にたゝぬ事をせざる事

先に取り上げた清水は、「リアルタイムの創出知」とは、判断の基準となる「常識」と要約しています。が、「実の道」とはまさに「常識」のことです。日常の中に、兵法の極意があると言っているようなもの。ですから、宮本武蔵の『五輪の書』はつまらんといい人が多いのですが、究極のぎりぎりの判断の基準は、日常の「常識」の中に全てあるというのですから、あたり前のようですが、これを剣の極意を突き詰めた思想と読めば実に驚嘆すべき思想です。

前田英樹は、『五輪の書』は自伝的放浪の記で、デカルトの『方法序説』も似たような構成で、二〇年の放浪の後に『方法序説』が書かれ、その六年後に『五輪の書』がでたことから、同時代的でどこか似たところがあると指摘しています。デカルトが、なぜ二〇年も放浪したかという点、中世以来の学校の学問が、何の役にも立たない砂上の楼閣と見極められたからです。デカルトは、傭兵となつて戦闘を経験したり、剣術に凝つて実技書まで書いていて、武人なのです。デカルトの『方法序説』に『デカルトの四則』と呼ばれるものがあります。要約すると、それは次のようなものです。

- 一、明晰、判明に自分の心に現れるもの以外は、何もかも自分の判断に取り入れられないこと。
- 二、取り扱うすべての問題を、できる限り小さな部分に分割すること。
- 三、最も単純なものから、次第に複雑なものへと順序を定めて進むこと。
- 四、そうやって進みながら、進んできた全体を常に枚挙し、完全に点検し直すこと。

武蔵からすると、これは「外道」の考え方でしよう。しかし、役に立たない思弁に騙されまいとする強い意志には共通するところ感じられます。ところで、デカルトが『方法序説』で記さない、ドナウ河畔の「暖炉部屋」における「三つの夢」の事件があり、これは、デカルトの生涯の決定的転機、彼に学問の設計者たることを決意せしめた一つの重大な事件を迎えたといえます（田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢』『方法序説』を読む』岩波現代文庫）。非常に長い夢でそれ自体たいした意味も無いと思いついで、思いつき簡約すると、第一の夢では、道を歩いていると幻影が現れておびやかし、烈しい風が吹いて渦巻きの中に捲き込むという情景で（そこに人も出て来ますが）、第二の夢では、雷鳴のごとき音に驚かされて飛び起きると、部屋の中をたくさん火花が降ってくるのが見え、第三の夢では、机の上に辞書と詩華集が載っている情景です。デカルトは、第一の夢と第三の夢を解釈して、これらは天の啓示で、「真理の霊の啓示」と確信します。そもそも、デカルトは、「この日、驚嘆すべき学問の基礎を発見した」という思いで心を一杯にし、非常な興奮に充た

されて眠りにつき、一晩のうちにつづけて天から来たとしか思われぬ三つの夢を見た」（原資料は失われこのノートを直接見たアドリアン・バイエの報告書）といえます。夢自体には、それほど大きな意味もないのですが、興味ぶかいのは、眠る前に異常な興奮状態で、第二の夢では、「雷鳴のごとき音に驚かされて飛び起きると、部屋の中をたくさん火花が降ってくるのが見えた」のですから、これは一種のトランス状態に陥っていたことを物語っています。

おそらく、このとき幽体離脱を体験していて、心身が二分されていたのをはつきり感じたはずで、そして「真理の霊」とは神であり、デカルトはそれをもって神の存在証明が出来たと考えたはずで、『方法序説』はだいたいそんな構造になっています。禅では、東洋では、幽体離脱しても本人に必ず返ってきますので、心身は一体ですが、デカルトでは、西欧では、幽体離脱すると、魂（神）と身（自己）に分離するようです。デカルトは、既存の中世以来の学校の学問を徹底的に疑いましたが、しかし、神を疑えば火炙りにされる時代です。むしろ神の存在証明がデカルトには必要でした。ある意味では、見え

ざる闇からの真剣を相手に、ぎりぎりの戦いをしていたはずで。その中で、「デカルトの四則」は、武蔵と同様、西欧の日常の「常識」の中から生み出されたものに違い有りません。

さて、「下駄」の話から、随分と遠くにまで来てしまいました。身体論の基礎は、足の裏にあります。「下駄」に張り付いたように歩く「二軸動作」は、日本の芸能武芸の基盤になっています。特に、武術においては、ぎりぎりの判断・行動に関する英知が積み重ねられて、リアルタイムの創出知（無形の位と「転（まろばし）」に至りました。ぎりぎりの判断には、洋の東西を問わず、「日常の「常識」こそが極めて有効であることが分かりました。では、「日常の「常識」そのものが打ち壊されたとき、「足の裏」の思想はどうかあがくのでしょうか。「足の裏」の文化が強制的に断たれたとき、何をもって生きようとするのでしょうか。石原吉郎の詩に、シベリア拘留を基にした「土地」という詩があり（『現代詩文庫 26 石原吉郎詩集』思潮社）、それがヒントになるかも知れません。

そこからが膝であるく土地
膝だけであるく土地だ

そこからが

足うらの役立たぬ土地

すべて直立するものが

こころを入れかえる土地だ

そして忘れるな ここからが

肘と膝とであるく土地

すべて僧侶があゆみ捨てる土地だ

いわば 遺言の

所在のごとき土地

肘と ただ膝がしらで

悔悟のように杭を

打ってまわる土地だ

そして忘れてはならぬ

かつてどのような兵士でも

この姿勢でしか

前進を起さなかったのだ

季村敏夫はそれをうけて、「膝で歩く」の詩を書きます（『膝で歩く』書肆山田）。この詩は、石原吉郎の詩に呼応して、日本が積み上げてきた足の裏の文

化・哲学・思想を無残にも断ち折られた無念さを、
我が身に引き受けて「悔悟」の念としてとらえます。
シベリアの大地をコンクリートの大地に置き換えて
みると、足のうらと地面とのわずかなすき間には、
現代ではもう「悔悟」の杭を打ち込む余地すらない
のかもしれない。

以下に「膝で歩く」部分より。

どこにひきかえすのか抑留され

凍った土地につながれたどの兵士も

足のうらは役にたたず

肘と膝がしらで這う姿勢で*

身を保つしかなかった

二足歩行をいまだに信じている精神よ

膝を組みかえてみよ

それだけで一変する思考がある

シベリヤ強制収容所から生還した詩人は

足のうらと地面との

わずかなすき間に

悔悟の杭をうちこみながら語った

*石原吉郎の「土地」「膝」

連載
エッセイ

淘汰される学問と研究者

リチャード・ドーキンスが著した『利己的な遺伝子』（一九七六年、訳書は紀伊国屋書店（一九九二年））は、生物進化に関する一般教養書であるが、ニューヨーク、ウォール街の証券マンに良く読まれたという。建築が専門で、進化論に関わることなどほとんどないが、この邦訳を読んで強い印象を受けた。例えるなら古代王国の興亡を記録した歴史書の読書感に繋がるかもしれない。

宗教や祭祀などに身を委ねることなど全くなく、自然科学信仰の王道として、科学原理に基づき信頼感に足る利便をもたらす学問である工学を志し、日本の、また世界の無数の同業との厳しい競争に臨もうとする工学系の学生への一つの教養として、私に関わる学生の皆さんには、読まれることをお勧めしている。

私自身は進化論の門外漢である。しかし、全く無縁でもない。工学における最適化問題では生物進化過程をアナログした遺伝的アルゴリズムを利用することは多い。最適化計算では、

選り出される最適候補の陰で劣等解の烙印を押され、振り落とされる個別解の生々しさに、いつも感情移入する自分を発見する。

読書後にドーキンスの本を正しく読み取ったか否か試験される訳でもなく、彼の主張を正確に理解している自信はないが、進化論は「競争、淘汰」という身近でつい感情移入してしまう話題であり、様々な場面で進化論を比喻に用いてしまう。進化論は個々の個体生物の生存競争を見ているわけではない。個体の属する集団、生物種の存亡を見ている。集団と個の関係性は、当然ながら倫理や道徳への連想も生む。有限な資源という制約の中での生物種間での厳しい生存競争、淘汰による生物種の生き残りの中で、個の果たす役割を考える時、道徳や倫理の問題に直面する。ドーキンスの本の中で、主役となる遺伝子には「利己的」とか「利他的」とかといった名前が付けられており、個体の自己犠牲による、生物種という集団の生き残り作戦が語られている。個体の守るべき道徳や倫理をいや

加藤信介

かとう しんすけ

東京大学生産技術研究所教授

（専門は都市・建築環境調整工学）

が故にも連想させる。しかし、話題は自然科学であり、道徳や倫理への言及はないが、感情移入の結果、道徳や倫理へのある種の諦観を促す。

遺伝子に意志はない。事実が先にある。生き残った遺伝子には、生き残った事実が先にあり、有利に働いた形質が偶々あったと説明される。遺伝子が前もって意識的にそうした形質を身に着けたわけではない。道徳や倫理を守ったから種が絶滅を免れたのではなく、絶滅しなかった事実を、道徳や倫理が後付で説明できるだけである。この本が我々に与えるこれらの毒気は、結果という事実が優先し、理屈は後から付いてくるという、一種の非道徳、非倫理的思考を促す。ウォール街の証券マンに愛読されるだけのことはあると実感する。

「ウォール街の証券マン」に知り合いなど一人もいないので、「ウォール街の証券マン」を自由に想像する。すべて計算づくの人であろう。感情に流されず、損か得かの合理主義で物事を判断する。厳しい競争にさらされ、能力を見限られれば、ポイ捨てされてしまう不安を抱え、虚勢でこれを隠す。そうに違いない。そうした人であろう「ウォール街の証券マン」に、今ど

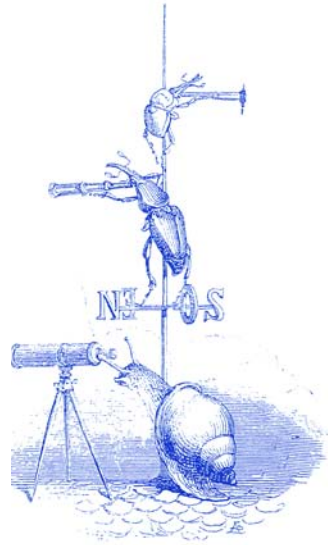
きの研究者は共鳴し、連帯感を実感する。

証券マンが市場社会という実力社会の中で、いつも淘汰の競争に晒されているように、研究者も厳しい淘汰の世界に晒されている。大学院を修了しこれからという時、安定した身分を保証してくれる研究環境など極めて限られている。多くの新米研究者は、任期付きの研究職にし可就くことができず、研究成果を挙げ、相応の評価が得られなければ次の職場を見つけることもできない、不安定な立場に置かれる。厳しい社会である。

淘汰の競争は、研究者だけではない。学問分野も淘汰の社会にいる。マイナーな学問分野は、学生の減少、研究費の縮小など様々な側面から、他の学問分野との資源獲得競争に敗れ、絶滅の危機を迎える。

生物種の淘汰も、研究者の淘汰も学問分野の淘汰も、すべては資源が有限という制約に発している。現代社会は、人類の幸福に多大の貢献をした様々な学問分野やそれを支える研究者にどうしてかくも厳しい世界を歩ませるのであるうか。

フィールド 便り



リレー連載

忘れられた当たり前を探す！目からウロコのフィールドワーク⑬
フィールドワークでヒルと付き合う…
人を噛む生き物が育む感情、感覚、想像力

石橋弘之

いしはし ひろゆき

東京大学大学院農学生命科学研究科 博士課程

(専門はカンボジア地域研究)

ヒル(蛭)

——フィールドで遭遇する厄介な生き物

カンボジアの森でヒルに足を噛まれた。足は大きく腫れあがり「まるでゾ

ウのようだ」と言われた。完治まで二週間を費やした。それ以来ヒルが恐くなった。

カンボジア西部の山岳森林地域に於けるカルダモン山脈。シヨウガ科の

カルダモンの特産地であり、無数のヒルが棲む森が広がる地域。そこにはカルダモンを交易品とする人々が一〇〇年以上も前から暮らしてきた。

その日、私はカルダモンの花を見ようと土地の若者に案内してもらった。森の片隅の暗がり小さく咲く白いその花を見て歓喜した。早速写真を撮り、歩道に戻り一息ついた。ふと足元が気になってサンダルを脱ぐと両足の甲と指にヒルが何匹も噛みついていった。足にへばりつき蠢くその姿に驚愕して、大慌てでヒルを素手でむしり取る私を、若者は面白おかしく笑った。宿泊先に一時間ほどかけて歩いて戻り、やがて傷口が化膿した。

カルダモン山脈の人々の生活と歴史を知りたいと森に飛び込んだ私を嘲笑うかのように、その後もヒルは噛みついてきた。

家々を回っていた時も、くるぶしに丸々と膨れ上がったヒルがひっついた。



図1 乾季の2月に咲くカルダモンの花。



図2 ヒルに足を噛まれた時に履いていたサンダル。その昔、地元の人々はカルダモンを取りに森に入るときは靴を履くことは禁じられていた。



図3 血を吸って、勝ち誇った様子で地を這うヒル。ティエックという小さく短めの種類。

そばにいた人が慣れた手つきでタバコの火を押し付けるとヒルはいとも簡単にポロリと落ちた。血を吸って膨らんだ姿を見てその人は言った「腹いっぱいになったね」。勝ち誇ったように、身を伸び縮みさせて地を這う姿を見て、苛立ちともいえない、何ともいえない気持ちになった。

森で暮らす感覚を呼び起す生き物

そんな生き物とこの地域に住む人々は、昔からつきあってきた。あるとき、五〇歳の男性と話していると、カルダモンのことに話題が及んだ。初めて



図4 焼畑用地に陸稲を植える穴を棒で掘る。

カルダモンを取りに行ったのはまだ幼い九歳の頃。数十人で集まり一週間かけて森に入り、小屋を建てて肩幅程の小さなゴザを敷いて寝泊まりしたこと
を「楽しかった」と語った。

私がヒルはいたかと聞くと「おお！

本当にたくさんだ！ 足にもつくし、頭にもつく。私なんか雨が降ってる時に口の中にまで入られたんだから！」。
口に入ったって、どうしてわかったんですか？

「ご飯を食べている時に気がついたん



図5 焼畑用地周辺の森は、ダム貯水池として伐採された後に、キャッサバ農園と化した。



図6 雨でぬかるんだ土の上を走る高級木材の運搬車によって壊される村の道路。



図7 水力発電ダム開発下で森を縦断する形で建てられた電波塔の一つ。

だよ」。

それほどヒルが多いのなら、どのように身を守ったのだろう。聞くと、腰に下げた竹筒に塩や石灰を混ぜた薬を入れておき、足に塗ったのだという。

別の日に、この男性に案内してもら

い、畑の出づくり小屋に行った時もヒルはいた。それを見て悲鳴を上げそうになった私と違い、男性は慣れた手つきでヒルを木の上に乗せて鉈でタン、タンと叩き刻んだ。

開発下の森林消失のなかで 変わる生活

その畑も今はなくなってしまうた。二〇〇九年に水力発電ダムの開発が着工され、この機会に便乗した企業、商人、労働者が高級木材の伐採を始めたのだ。やがて高級木材が枯渇すると、キヤツサバやトウモロコシなどを作付けするための農地開墾が始まり、かつての畑は、一気に商品農作物の農園に転化された。そうしてカルダモンの森、ヒルが棲む森の多くが伐採された。いつしか私もヒルに噛まれる心配をしなくなつた。

それでもなお、あまりにも多くのヒルが棲む森とともに昔から暮らしてきたこの地域の人々にとって、ヒルはそう簡単に忘れることができる存在ではなかった。

伝説 獵師を喰うヒルの王

それは、ヒルの王の伝説として今なお語られている。

二〇一二年六月、村を再訪した雨季のある日、道を歩いていると知人の男性の一人があいさつ代わりに声をかけ



図8 チュルーンという体の長い種類のヒル。砂地の多い川の中で体をくねらせて泳いでいたりする。ヒルの王の伝説に登場するのはこのタイプ。

てくれた。

「カルダモンの季節だ！ また来たね！ 今年はいくらで買ってくれるんだ（笑）」

そう言うなり、男性はそのとき立ち寄っていた古老の家に私を招いてくれた。古老が「昔はカルダモンの森を伐採



図9 川で元気に遊ぶ村の子供。

するなんてことはなかったね。今やもうすっかりなくなっちゃったけど、カルダモンの森には椰子打ち池（スラバンニユドーン）があつて……と語り始めると、横に座っていた男性は「おじいさん。その話は私にさせてください……」と前に乗り出し語りだした。

あるとき七人の獵師が森の中でご飯を炊くことになった。ご飯を炊く水がないので、獵師の長が子分の一人に水を汲みに行かせた。ところが、なかなか戻ってこないで二人目の子分に水汲みに行かせた。やがて、三人、四人と後から様子を見に行つた子分も次々といなくなつた。最後の子分も戻ってこないで、とうとう獵師の長が池を見にいくと——そこには見上げるほどの高さの巨大ヒルがいた。獵師の長はすかさず、椰子の実を弾にして弓を放ちヒルを狙つて仕留めたのだつた。

獵師の子分を喰う巨大なヒルの王。
そのヒルの王を仕留めた獵師の長。森
に入り、無数のヒルと奮闘して暮ら
してきた人々は、いつしか想像力を膨ら
ませ、人を喰うヒルの王と闘う獵師の



図9 川辺にて村の子供が撮影してくれた写真

伝説をも生みだしたのだ。

おわりに

現在のカンボジアでは、ゾウやクマ、ワニなど大型野生動物が保全活動の対象とされている。そこでは人々が日々の生活のなかで否応なく接するヒルのような生き物が語られることはほとんどない。

しかし、そのような小さな生き物とのつきあいは、日々の暮らしの中では避けることはできない。それは、体中にへばりついて人の血を吸う厄介な生き物であり、大事にされるどころか、嫌われさえもする。

それでも、その生き物の名前をひとこと口にするだけで、森に入った時の感情や、感覚が呼び起こされ、いきいきとした声と表情で人々が語るきつかけとなる。それは、想像力をふくらませ、世代間で語り継がれる伝説をも生

んだ、そうした力を秘めた生き物がヒルだった。

いま、人々がヒルという生き物とつき合いを築いてきた森は伐採されつつある。そのなかで生活の場も急速に変わっている。森がなくなれば、ヒルに噛まれて厄介な思いをしなくてもよくなるだろう。そうした生活を選ぶのも選択肢の一つかもしれない。しかし、そのことと引き換えに生き物とのかかわりを通して呼び起こされる感情、感覚、想像力を生んできた地盤も崩れ去るかもしれないことを忘れてはならない。あるいはまた、森に暮らしてきた過去の経験を土台に、人と生き物、人と人の関係をつなぐ新たな場を人びとはつくりだすのだろうか。その行き先をこれからも見て行きたい。

葉っぱちゃん、こんにちは

以前、今の自分の気持ちにびったりな葉っぱを2つ拾って、自己紹介をするということがあった。例えば、緑と赤のグラデーションの葉を見せながら、「仕事疲れて元気がなかったですが、だんだんやる気がわいています」など。葉っぱの名前は、知らない。知っている人もいたかもしれないけれども、そこに言及する人はおらず、葉っぱ1つ1つの特徴をよーくみながら、まるでそれが人格でもあるように個性を見出していた。感じることに、重視。これもよい。

しかし、名前を知るとまた違う。私にとっては、まざカタバミ。ハート型のかわいい葉っぱで、クローバーと間違えられやすい草。気がついてみると、道端、コンクリートの割れ目、あちこちにある。

次にミカンの木。アゲハの幼虫を飼うはめになった時にミカンの葉しか食べないという衝撃の事実を知り、近所を探しまわった。そのおかげで青虫の目なら

ぬミカンの木を見る目が発達したようで、自転車でも通り過ぎて、あ、ミカンの木！とわかる。

そしてクスノキ。ツンとする特有の匂い（シヨウノウ：昔は防虫剤として使われていた）がすることを知っていたから。さらに葉を食べている青虫を見つけ、それがあの美しいアオスジアゲハになると知ると、ますますクスノキに愛着がわいてしまう。

名前を知る、個を知るということは大きい。これまでは単なる風景の一部くらいだったものが、ある時からそれだけ浮かんで見えるのである。大勢の子どもの中でわが子を発見するような感覚。そしてなんらか価値を見出す。世の中全てのものを知ることが難しいが、こんな感覚が他のことについてもいえるのだろうかと思う。

近頃気になるのは、くちばしと足がオレンジ色で、トットコトットコ面白走り方をする鳥。勝手に「トットコドリ」と呼んでいるが、環境の変化か、どうも最近よく見る。

アオスジアゲハとクスノキ



ナミアゲハとミカンの木



0歳からの

こどもサステナ

にまなぶ

2015
夏の号



カタバミ



蝶の写真：蝶の図鑑ホームページより
<http://www.j-nature.jp/butterfly/>

(こどもサステナ 文・構成 平松 あい)